

聖書日課 『からし種』 2024.1.14-1.21

<p>1月14日 (日)</p> <p>詩編 61編</p>	<p>「心挫(くじ)けるととき／地の果てからあなたを呼びます。高くそびえる岩山の上に／わたしを導いてください」(3節)。「地の果てから」神を呼ぶという言葉に、ルカ 17 章の重い皮膚病の人々が「遠く」に主イエスを見つけて叫ぶ姿を想う。私たちには「遠く」思えても、主イエスのまなざしが確かに私たちに注がれている以上、私たちの祈りが空しく終わることはない。</p>
<p>15日 (月)</p> <p>詩編 62編</p>	<p>「わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう。神にわたしの救いはある」(2節)。「沈黙して…」とはどのような沈黙なのだろう。詩人を亡き者にしようとする理不尽な暴力に対して、口で反撃し、暴力でやり返したいところをじっとこらえている姿が見えてくる(11 節)。「力と慈しみは神のもの。救いと希望は神にある！」と固く立つ信仰に、少しでも近づきたい。</p>
<p>16日 (火)</p> <p>詩編 63編</p>	<p>「わたしはあなたを捜し求め／わたしの魂はあなたを渴き求めます。あなたを待って、わたしのからだは…水のない地のように渴き果てています」(2節)。この詩人は主を待って、待って、渴き果てるまで待ち続けている。主イエスは十字架で最後に「渴く」と言われた(ヨハネ 19:28)。この世界で神と共に生きるということは、この「渴き」を知ることなのだろうか。</p>
<p>17日 (水)</p> <p>詩編 64編</p>	<p>「人は皆、恐れて神の働きを認め／御業に目覚めるでしょう」(10節)。「毒を含む言葉を矢としてつがえ」(4節)「巧妙に悪を謀り」(7 節)「見抜かれることはない」(6 節)と大きな顔をしている人々。神への恐れを失った人間の姿というものは昔も今も同じようだ。わたし自身も、そういう姿と無縁とは言えまい。主よ、今日、あなたへの恐れに目覚めさせてください。</p>

聖書日課 『からし種』 2024.1.14-1.21

<p>18日 (木)</p> <p>詩編 65編</p>	<p>「罪の数々がわたしを圧倒します。背いたわたしたちを／あなたは贖ってくださいます」(4節)。献げものを携え賛美を歌いながら、この人は自分の中に「罪の数々」を見つめないわけにはいかなかった。わたしの罪は一つではない。数珠つなぎで、いくつもの罪がからみあっている。その救いがたい私たちを贖い、救い出してくださった十字架の主の憐れみに感謝。</p>
<p>19日 (金)</p> <p>詩編 66編</p>	<p>「全地よ、神に向かって喜びの叫びをあげよ」(1節)、「神は我らの魂に命を得させてくださる。我らの足がよろめくのを許されない」(9節)。出エジプトを経験した人々は「海を変えて乾いた地とした」神の御業を見て、全地を圧倒する賛美を歌った。今の現実は厳しくとも、平和を待ち望む人々が全地をとどろかして賛美する日が必ず来ることを信じ、歩みたい。</p>
<p>20日 (土)</p> <p>詩編 67編</p>	<p>「神がわたしたちを憐れみ、祝福し／御顔の輝きを／わたしたちに向けてくださいますように」(2節)。神の顔の輝きとは、どのような輝きなのだろう？主イエスと出会った人々は、主イエスの笑顔に神の顔の輝きを見たのではないか。主イエスが神の国を力強く語られるとき、この世界を照らす光を見たのではないか。私たちもこの方の光に照らされていこう。</p>
<p>21日 (日)</p> <p>詩編 68編</p>	<p>「この神はわたしたちの神、救いの御業の神／主、死から解き放つ神」(21節)。旧約の人々が思い描いた「この神」は、「御自分の敵の頭を打ち(22節)」、「わたしたち」だけを救ってくれる神であった。しかしキリストの十字架によってあらわされた「この神」の真実は、御自分の命を全ての人に分け隔てなく与え、命の奪い合いから解き放ってくださいる神である。</p>